

第24期 国立市社会教育委員の会（第9回定例会）会議要旨

令和4年1月25日（火）

[参加者]

- ・社会教育委員 日野、砂押、石居、矢野、栗畑、中野、朝比奈、笹生、生島
 - ・くにたち郷土文化館担当者
- [事務局] 井田、土方、長谷川

生島議長 では、皆さん、コロナの感染拡大が止まらないところなんですけれども、お集まりいただきましてありがとうございます。第24期国立市社会教育委員の会第9回定例会を開会いたします。

オンラインでの実施についても、この間皆さんと調整させていただいたりしていたんですが、やっぱり今日はいらっしゃるということもあって、できれば対面で何とかできないかと思っていたところでした。端的に進めていければいいなと思っておりますので、よろしく願いいたします。

今日は倉持副議長が御欠席ということですのでけれども、それ以外の皆さんには御出席いただいておりますので、定数に達しておりますので、本日の会議を始めさせていただきますと思います。

まず、本日の配付資料につきまして、事務局からお願いいたします。

事務局 事務局でございます。本日もよろしくお願いいたします。

本日は第9回の定例会となっております。まず次第が載っているほうの束を御覧ください。次第の下に、資料といたしまして、くにたち郷土文化館さんから作成いただいた補足資料、ホチキス留めで2つございます。

もう一つの束を御覧ください。こちらは前回、第8回の議事録が一番上に載っております。こちらの内容でお間違いなければ、市のホームページに掲載させていただきます。その下、公民館だより、図書室月報、図書館のいんぷおめーしょん、それから、社教連会報というものをおつけしてございます。

配付資料につきまして、不足等ございませんでしょうか。

説明は以上でございます。

生島議長 ありがとうございます。

それでは、次第2の施設担当者ヒアリングに入ります。

本日は、くにたち郷土文化館の施設担当の方においでいただきまして、ヒアリングを行うということになっております。

事務局から、何か補足説明等ございますか。

事務局 事務局でございます。補足は特にございません。前回、第8回で大体、流れは皆さん把握されているかと思えます。前回の芸小ホールのヒアリングと同じような流れで進めていただければと思います。

事務局からは以上でございます。

生島議長 ありがとうございます。

では、ここからは司会を矢野委員と中野委員にお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。

中野委員 よろしく申し上げます。

（くにたち郷土文化館担当者 入室）

中野委員 それではこれから、くにたち郷土文化館からお越しいただきまして、ヒアリングをさせていただきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

本日、司会進行を務めます、国立市社会教育委員の中野です。どうぞよろしくお願ひいたします。

矢野委員 同じく矢野です。よろしくお願ひいたします。

中野委員 それでは、社会教育委員の皆さんから、簡単に自己紹介をお願ひしたいと思ひます。

日野委員 国立第三小学校校長の日野と申します。よろしくお願ひいたします。

砂押委員 NHK学園の砂押と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

石居委員 一橋大学の石居と申します。図書館協議会からの選出ということで参加しております。よろしくお願ひいたします。

栗畑委員 国立市体育協会から選出されました栗畑と申します。よろしくお願ひいたします。

朝比奈委員 国立市の民生委員から推薦されました朝比奈と申します。よろしくお願ひいたします。

笹生委員 東京女子体育大学から参りました笹生と申します。よろしくお願ひいたします。

生島議長 この社会教育委員の会の議長を務めさせていただいております、帝京大学に所属しております生島と申します。よろしくお願ひいたします。

中野委員 ありがとうございます。

それでは、今日出席いただきましたくにたち郷土文化館の皆様、御紹介をお願ひいたします。

郷土館担当者① 私が郷土文化館の館長です。よろしくお願ひいたします。

郷土館担当者② 私はくにたち郷土文化館で学芸員をしております。よろしくお願ひいたします。

中野委員 よろしくお願ひいたします。

矢野委員 早速ですけれども、ヒアリング項目について、お忙しい中、書いていただいております。こちらの項目に沿って御説明いただければと思ひます。よろしくお願ひいたします。

郷土館担当者② 1番目の特徴的な事業です。ほかの機関、施設と連携している事業ということで、いろいろなものがあるんですけど、4つ、大きなものとして今回は挙げさせていただきました。

1番は民具案内というものになります。今、ちょうど1月から始まるんですが、市内の小学校3年生が郷土文化館に来て、昔の暮らしについて学ぶ事業で

す。小学校との連携、それから地元のグループである、くにたちの暮らしを記録する会の皆さんの協力を得て、子供たちにいろいろな昔のことを伝えるような事業になっております。

2番の自然クラブですが、こちらは年間大体7回くらいの連続講座で、かなり古い時期からやっている、郷土文化館は1994年に開館したんですが、その少し後ぐらいから始まった事業になります。子供たち、小学生を対象にしているんですけど、様々な昆虫ですとか、魚ですとか、いろんな自然に触れ合って1年間成長していくというようなプログラムで、こちらはNPO法人国立市動物調査会との連携、調査会の皆さんが講師となって行っている事業です。

3番は、今年やった事業で1つ、施設という意味で取り上げたんですけど、旧国立駅舎関連のイベントということです。こちらは旧国立駅舎が昨年オープンしまして、郷土館ではなく、そちらでも展示を行ったり、場所を使っただけのイベントをしたというものとして、取り上げました。

4番の紙の工芸展と陶芸展、2つ並列で書いたんですけど、市民と一緒にやっている企画展があります。こちらは大体2年に1回ですとか3年に1回というペースで、市民の実行委員会の方が立ち上げた委員会と一緒に、委員会の人が中心となって、郷土館で展示を行ったり、イベントを行ったりというものになります。郷土館としては、それをサポートしながら事業を行っています。

特に陶芸展のほうは、郷土文化館が貸し施設の面も持っている博物館になります。研修室というお部屋と、講堂というお部屋があって、それらは有料で貸出しているんですが、また、陶芸窯が設置されていて、そちらでサークル活動をしている皆さんがいらっしゃるんですね。その方たちの、ふだんの文化活動の成果を発表する場になっています。

この4つが、特徴的なものとなります。

これらの事業について、少し話してしまったんですが、連携を始めた経緯、狙いということでお話しします。

1番目の民具案内、こちらは郷土館設立以前から、くにたちの暮らしを記録する会という会がありまして、この会が昭和50年代から60年代ぐらいにかけて教育委員会などと協力しながら、町の民具、昔の暮らしの道具などを集めて、第一小学校のほうに収蔵していたんですね。こちらの道具を使って、子供たちに昔の村の様子を伝えるというような活動をされていました。これが、始めは第一小学校の子供たちに向けてやって、だんだんほかの小学校にも会の皆さんが案内するようになってということがあったようです。郷土文化館がつくられたのはその活動からずっと後なんですけれど、1994年に郷土文化館がつくられた後は、郷土文化館を場所としてやっているということです。

狙いとしては、小学校3年生の社会科の単元で、暮らしの移り変わり、町の昔探しというものがあります。それに合わせて、様々な昔の道具を実際に体験してもらったり、また民具案内関連の展示として「むかしの暮らし展」というのを毎回開催しているんですけど、そちらで子供たちに暮らしの様子を見てもらったりということで、学ぶ機会にしてもらっています。

続いて、2番の自然クラブについてです。こちらは、先ほど少し話してしまったんですが、平成11年に初めて実施したもので、このときは単発でお願いしたようなんですが、この会の皆さんには事業としてではなく、展示で一度関わっていただいているみたいなんです。調査会の方が調査したものを展示するというのを昔やっていて、その後、実際に地域の子供たちに、動物や自然のことを教えるという事業をやりまして、参加者の方からも、継続してこういう事業をやってほしいという要望が多かったということで、それ以降ずっと継続して行っているものになります。

狙いとしては、国立の自然に親しむ、身近な自然の大切さなどを学ぶ事業と

なっています。

3番の旧国立駅舎関連イベントです。こちらは2020年4月に再築された旧国立駅舎がオープンしまして、2020年度は旧駅舎に関する展示と講演会を行ったんですけど、それは展示も講演会も郷土文化館で行いまして、今年は、文化財である旧駅舎のほうの場所を使って、そこで、駅舎の周辺の歴史を勉強するパネル展を行いました。関連イベントとしてトークイベント、「国立駅南口駅前広場ウンチクあれこれ」ということで、当館の学芸員が様々な、国立駅前の歴史のことをお話ししました。

また、ガイドツアーとして、円形公園というのが駅舎の南側、ロータリーのところにあるんですけど、今は入れなくなっているんですけど、昔あまり車が多く通っていなかった頃は自由に入れたということで、そこに実際に行ってみようという企画をしました。

狙いとしては、市の有形文化財である旧国立駅舎に関連する歴史の紹介を、現地で行うことを目的として、同時に郷土文化館の活動を知っていただく機会にもなったかなと思います。郷土文化館自体、南のほうにありまして、やはりどうしても、市の北側の人は南のほうになかなかなじみがなかったり、南の人は北になじみがなかったりという、やはり交通の便がどうしても、小さい市なんですけど不便ということもあって。こういう、郷土文化館から出て、北のほうにある旧駅舎で活動できたというのは、いい機会だったかなと思います。

続いて、4番の紙の工芸展・陶芸展についてです。経緯としましては、紙の工芸展は、日本の文化である折り紙に親しみ、また身近な紙という素材で創作することの喜びを実感することを目的として、平成10年より郷土文化館で実施されています。それ以前は芸術小ホールで開催していたんですけど、郷土館のほうより文化的なものということで、合うんじゃないかということで、途中から郷土文化館で実施されるようになりました。

陶芸展のほうは、平成7年に陶芸教室というのを郷土文化館で行いまして、ここから3つ、陶芸をやっていくサークルさんができまして、そのサークルさんの発表という形で、「第1回造形・陶芸に親しもう展」というのが開催されたのが始まりになります。このときは3団体でしたが、今は7団体ぐらいあるかと思います。もうなくなっちゃったサークルがあったり、新しく始めたサークルがあったりということです。

近年は、紙の工芸展が2年に1回、陶芸展は3年に1回実施しているところなんです。

狙いとしては、市民の文化芸術活動の発表の場として実施しております。

ここには6団体と書いていますね。今は6団体活動しております。

続いて、連携している内容、連絡先との役割分担や連携に当たっての工夫について、お話しします。

1番の民具案内に関しては、郷土文化館のほうでは実施するプログラムを考えて、小学校側と記録する会側の日程調整ですとか、必要なものの準備、場所の準備ですとか、あと実際に体験学習を行う際の、記録する会のサポートを行っています。

また、民具案内のときは関連事業として、「むかしのくらし展」という民具などの展示があります。そこでは、学芸員等で展示室を案内するという形になっています。記録する会は、主に子供たちの体験のサポートですとか、会の人にしかできない昔の生活の様子を、子供たちにお話ししたり、そういったことを主になさっています。会の方も、多分平均年齢は70後半から80代に入るぐらいだと思うので、年々サポートが必要になってきているところではあるんですけど、今年も加わってやったださっています。

続いて、2番の自然クラブについてです。こちらに関しては、事務的な部分

に関しては郷土文化館が行い、子供たちへの専門的な指導は調査会が行っています。必要に応じて、そういった指導についても郷土文化館のほうで補助して行っています。

続いて、3番、旧駅舎関連イベント。こちらは、旧駅舎のほうは施設の貸出しということで、郷土文化館が展示、イベントを実施した形になります。

4番の紙の工芸展・陶芸展に関しては、こちらもやはり事務的な部分を郷土文化館が担って、展示あるいは講座といったものは各実行委員のほうで行っています。必要に応じて郷土文化館が補助しております。

続いて、連携を行ったことによる効果や、感じている課題についてお話しします。

1番の民具案内についてです。児童へ指導を行っている記録する会の会員は、平均年齢80前後で、実際に体験した子供の頃の話を見聞に伝え、児童にとって、生活の移り変わりを直接聞く機会になっていると思います。また、国立市にある公立・市立の全11校が参加する事業になりますので、地域の博物館である郷土文化館を知る機会になっているかなと思います。

課題としては、先ほども言いましたが、記録する会の方が平均年齢80歳近いということで、プログラムなども、昔から比べるとちょっと変えてみたりもしているんですが、昔はわら細工教室なんて、縄ないなどもしてたんですけど、ちょっとそれは大変だからやめて、お話の聞き取りを子供たちにしたらどうかというのでテーマを少し変えてみたりとか。無理のないところで、記録する会の人を持ち味が出るテーマを考えたりというふうにしているんですが、やはり高齢化ということもあるので、課題のままあります。

続いて、2番の自然クラブについてです。こちらは毎回8名程度の会員が参加者を指導するというので、郷土館のメンバーだけではなかなかできないような、充実した指導ができています。継続して実施していることで、子供だった参加者が中学生になり、高校生になりというとき、調査会のほうの会員になってくれて、その子が今度大学に入って、本当に教える立場になってくれたり。そういったことが、この会に関してはありますので、継続的にやっているということが効果として表れているかなと思います。

課題としては特に、自然クラブに関して大きな課題は、今のところ、ないと思います。

3番の旧国立駅舎関連イベントについてです。これも先ほどちょっと言ってしまったんですけど、やはり南武線より南にある郷土文化館というのは、国立駅を利用する地域の人にとっては、なかなか交通の便の悪いところで、ふだん郷土文化館のイベントに参加してない方ですとか、そもそも郷土文化館のことを知らないという方も、やはり多くいらっしゃる。たまたま駅のところでやっていたから、こういったイベントを知ったですとか、こういう展示をやっていると知ったという方も多かったかなと思います。そういった意味で、当館の周知につながったのではないかなと思います。

あと課題としては、会場の広さが限られるので、やれることが限られているというところと、国立駅舎の中でいろいろやるというのはすごく面白い、いいイベントなんですけど、郷土文化館で実際に行っている事業もいっぱいあるので、その業務とのバランスで、今後、もしこういったイベントをやるときには、どれぐらいできるかなというところで、バランスを考えながらやっていかなくては行けないかなと思います。

4番、紙の工芸展・陶芸展に関しては、実行委員会の方ですとか、実行委員会ではないけど、展示の出品者という方がいるんですけど、紙の工芸展・陶芸展をやるときには、毎回一般からも、出品しませんかということで募集するんですが、それで出品されたという方が何人かいて、その出品している方の知

り合いという方が多く来館されます。なので、ふだん歴史が好きで郷土館に行ってみようですか、美術が好きだから行ってみようという方ではなくて、知り合いの人が参加しているからちょっと行ってみようかなという層が結構いらっしゃるのかなと、アンケートなんかを読んでいても感じているところで。そういった意味で、地域にはこういう博物館があるんだよということを知っていただく機会にもなっているのかなと思います。

こちら展示室が、郷土文化館の主催で行っている展示もありますので、結構、実行委員会の方は何月にやりたいとか、そういう話もいただくんですけど、その辺はうまく、郷土館のほうの企画展と、バランスよく仕事ができるところで決定させていただかないと、なかなか継続的にやっていくのが難しいかなというところもあるんですけど。こちら、今のところそんなに大きな課題はないかなと思います。

続いて、他の施設・機関等と連携する必要があると感じているものの、連携できていない事業はありますかということです。

郷土館としては、市内の大学とも連携ができたらいかなとは思っているんですが、一橋大学さんとの連携ですとか、そういったものはなかなか、今のところ、継続的な連携という意味では取れていないかなと感じているところです。郷土文化館の収蔵資料ですとか、国立に関わる資料の研究ですとか活用といったところで、大学さんとも何か連携できるというのではないかなと感じています。

連携できない理由とか課題ということで挙げさせていただきますと、継続的に行っている事業がある中で、本腰を入れて、じゃあ、連携して継続的なものをいうと、なかなか一歩踏み出せていない、郷土館側で踏み出せてないところもあるのかなと思うんですが。例えば、大学側が連携を取ってメリットがあるというふうに思ってくださいのかなというところも、ちょっと調査が行えていないこともありまして、なかなかお声かけできていないところです。

解決に当たってということでは、まずはつながりを持つ、何かしらつながりを持っていくことが大切かなと考えています。今年度は古文書講座、「忘れられた安楽寺の記憶」という3回講座で、一橋大学の大学院社会学研究科の特任講師、古畑さんに講師で携わっていただきます。あるいは、2025年は一橋大学の創立150周年に当たるということで、大学資料室と、資料提供だったり情報共有ということで、連携できるのではないかなと考えています。実際、資料室の方が来てくださってお話ししたりということはあるんですけど、実際どれぐらいうまく関われるか、これも分からないんですけど、やはり、つながりながらお話を深めていくというふうにできればと考えています。

続いて、「コロナ禍において利用制限等の対応を取られたのではないかと思います。特に、他の施設・機関との連携事業を行うに当たっての困難や、逆にコロナ禍を機に新たに始めた事業の取組などがあれば教えてください」ということですが。

新たな取組としては、映像の配信を行っています。

ヒアリング用資料のほう、すみません、こちらの説明がなかったんですけど。1ページ目に記録する会の活動として、わら草履作りということでQRコードを載せているんですけど。ホームページに今、「おうちで郷土文化館」というページを作っています。昨年から少しずつ、いろんな映像を撮って掲載しているんですけど。わら草履作りですとか、結局コロナになってしまって参加者を募集して実施するにはちょっと、講師の人と密接にやり合わないとなかなか教えられない事業がいっぱいあったんですね。このわら細工教室というの、くらしを記録する会の皆さんが講師なんですけれど、結局、菱餅作りも、

十五夜だんご作りも、全てコロナでできない状況になってしまって、会の活動自体も止まってしまうという状況になってしまったんですね。

そのとき、じゃあ、映像だけでも、会の方だけ少人数で出てきていただいて、ふだんいろんな方たちに教えているものを、会の方たちだけで、だんごを作ったり、わら草履を作ったりということでもやってもらって、それを映像として撮って、ホームページで公開していこうということで、かなり、4本ぐらいですか、今年も入れると4本か5本ぐらい、記録する会の方が関わってくださった映像を上げているんですけれど。

コロナじゃなかったら、逆に撮れなかったものだと思うんですね。参加者がいる中で、映像を撮りながら作り方をじっくり見せてくださいってなかなかできないので、逆にコロナだったから記録して、ふだんの参加者でない人にも見せたり、会の活動というのも見えていただける機会になったかなと思っています。

また、やはりホームページ関係が多いんですけど、収蔵資料のデータベースの公開ということで、今年夏に行った、国立の考古学者なんですけど、甲野勇さんという方の資料、72点のデータベースをホームページで公開しました。そういったことで、他館からも、その公開した資料の中で問合せがあったりですとか、資料の本当に一部ですけど、オープンにすることができたかなと感じています。

あと、新たに行ったこととしては、Zoomを使った講演会ですね。企画展のとき、講師の先生が遠方にいらっしゃったので、北海道にお住まいだったんですけど、ちょっとコロナでこちらに出てきてというのはしんどいなということで、でも東京にたまたま出てこられる機会が別にあったので、そのときにお話をさせていただいたのを撮影して、それを企画展に合わせて放映するという形で、講演会を行いました。職員もこれは初めてだったので、本当は最後、質疑応答だけは北海道の先生とつないでやる予定だったんですけど、音声が悪く来なかったりということで、本当に初めてのことだったので、最後うまくいかなかった部分もあったんですけど、すごく、いつも参加されないような方も、逆にいらっしゃってたかなという印象です。

続いて、民具案内でのリモート活用、これは括弧で予定になっているんですけど、実際もう今年度、1回始まったんですけど。記録する会の方が、民具案内でいつも子供たちを前に、ヒアリング資料の1番目に、子供たちを前にお話ししている写真があるんですけど、こういった形で、本来なら子供たちが質問をしたことを、椅子に座っている記録する会の方たちが、昔の遊びはこんなことをしてたよとか、そういったお話をしてくださるんですけど。

今年も、対面でするのは怖いかなということで、リモートで別のお部屋で、子供たちは講堂というお部屋に集まって、記録する会の方たちは図書室のほうに集まっていたらいい、リモートでつないで子供たちの質問に答えるという形で実施することになりました。これも去年は本当に全く、会の方も参加できなかったもので、先生とか子供たちもがっかりされたと思いますし、記録する会の方たちも、やっぱりちょっとがっかりされた面があったと思うんですけど。今年はいった形で挑戦して、実施しています。

続いて、「他の施設・機関と連携するに当たって、課題と感じているところがあれば」ということです。

近隣の博物館ですとか、そういったところと合同で調査したり、そういった取組というのがなかなか、それぞれ博物館でやっていることがあるので、なかなか一緒にというのは難しいところもあるんですけど、合同で、例えば多摩川のこととか、市域を越えたことで何か調査などができると面白いのかなとは思いますが、今のところ、こういったことはできてないところです。

ただ、三多摩博物館協議会という三多摩の、公立じゃない大学の博物館も、

皆さん入っているんですけど、そういう協議会がありますので、その中で一緒に研修会をしたりですとか、機関誌を一緒に出したり、そういったつながりはあるので、何かそこからまたもう一步踏み込んで、近隣の学芸員さん同士、一緒に調査とかできたらいいのかなというふうにも感じているところです。
以上になります。

矢野委員 丁寧ありがとうございます。

委員の方の質問の前に、ちょっと体制のことだけ教えていただければと思うんですが。学芸員さんの数と、正規であるか、非常勤であるかというようなことと、それ以外の職員で、正規の職員がいらっしゃったら何名ぐらいいらっしゃるのか、その辺りを。

郷土館担当者① まず、職員体制なんですけれども、固有職員というのは5人です。まず私、あと主査が1人います。あと学芸員が4人いるんですけど、そのうち3人が固有職員という形で、もう1人は嘱託員という形です。あとは窓口とか、受付とかで5人の嘱託員がいて、日々交代でやっています。

あとは、いろんな資料を調べたりするので、常時というか不規則なんですけれども、臨時職員を3人から4人ぐらい雇って、やっています。あと図書の整理の者も、その臨時職員の中にいます。そんなところが人員の体制です。

矢野委員 ありがとうございます。学芸員の方というのは4人で、1人の嘱託員の方も、常勤に準じた時間数なんですか。

郷土館担当者① 若干時間は、固有職員の場合は普通の、私たちと同じように8時半から原則的には5時15分まで、嘱託学芸員の場合は8時半から5時までなんですけど、週4日です。だから、固有職員より1日少ないんです。だから、全体的に時間的には短くなります。

矢野委員 学芸員さんの場合、専門ごとに分かれていると思うんですが、その4人の方の専門を教えてくださいてもいいですか。

郷土館担当者② それぞれ一応名のっているところでは、私は民俗と美術を担当しています。あとの2人は、博物館学が1人と、歴史、本当は中世なんですけれども、の者が1人です。ただ、それぞれ時代ですとかジャンルを関係なく、国立のことをやっているという状況になります。結構、専門だと私は武具だったり、ピンポイントになっちゃったりすることが多いので、私も、武蔵野美術大学の出身で、美術も本当は描くほうなんですけれども、ずっと民具のほうと美術のほうを専門にやっています。

郷土館担当者① それぞれ、今話をしたようにあるんですけど、先ほど来いろいろ事業を説明している中で、例えば自然クラブはやっぱり学芸員がつきますので、全くそれは専門的じゃないですけど、ずっと一緒になってやっていると、陶芸とか折り紙も、特に学芸員さんが昔から勉強しているわけじゃないんですけど、一緒になってやっていると、そういうもろもろのことで、一緒になってやっているとこの感じですか。

矢野委員 大きい博物館ではないので、教育普及を、企画展をやる方と分けているのではなくて、一緒にやっていると。そういうことですね。

郷土館担当者① そうです。

矢野委員 はい。ありがとうございます。

皆さんの中で、御質問とかもっと詳しくお伺いしたいとか、追加の質問も含めて、ぜひ出していただければと思います。

中野委員 何点かお伺いします。博物館として機能されているということのようですが、私、何回か伺ったことがあったんですけど、その中で、所蔵している美術品を展示するというのもあったんですけど、国立市には美術館がないので、所蔵品の展示企画とかいった場合、そういった連携なんかも出てくるんじゃないかと。所蔵品だけじゃなくて、お借りするとか、そういう連携もあるんじゃないかと思ったのが一つです。

もう一つは、何回か伺った中で、私、育成会から来ているんですけど、育成会の企画で御相談に伺ったことがあるんです。そのときにボランティアセンターを紹介していただいて、今もずっと続いているカルタの会というのをやっているんですけど、そういった意味でも、今お示しいただいた連携事業の中に、そういった企画というか連携もあるんじゃないかなと思いましたので、お伺いしたいところです。

もう一つ。お伺いした中で、民具とかそういったものが、かなり所蔵されているんですけど、武蔵美にも民具がありますよね。ああいったところでは相当な所蔵品があるので、連携されると、御出身なのでよく御存じだと思いますけど、ちょっと思いました。

以上です。

郷土館担当者② ありがとうございます。

まず、初めの美術に関しては、国立の作家さんの展示をすることが多くて、今年も関頑亭先生という、彫刻家と言うとあれですね、いろんな分野をされる芸術家の方で、お亡くなりになって1年というところで、今年の春、企画展をしました。また、三浦小平二さんという、国立で活動した青磁の分野で人間国宝になった方の展示を、今年の秋、行ったところです。

作品を借りるというところでは、国立の方をやっぱりテーマにすることが多いので、そういったことで、お借りする場所としては比較的、作家さんの親族の方にお借りすることが多いです。ただ、少し前の展示なんかですと、たましんさんですとか、そういったところからも資料を借りたりということで、そういう意味では博物館同士の連携でお借りしていることがあります。

育成会さんのほうで、来ていただいたこともあるということで、もしかしたらボラセンさんを紹介したのも私かもしれないんですけど。くにたちカルタというカルタが、国立にはあるんですが、それを制作するに当たって、初めにボラセンさんが郷土文化館のほうに、カルタの裏に国立のことを、例えば駅舎なら駅舎の説明とかも書いてあるんですね。そういう説明書きの文章が合ってますかというので郷土館に来てくださったこともあって、その御縁で、ここ最近やってないんですけど、郷土文化館でもカルタ大会をさせていただいたりとか。そういう意味で、今回この中には挙げてないんですけど、ボラセンさんとも関わりは深いところにあります。

あと、何年かに1回くらいは、1年に1回くらいかもしれないんですけど、ボラセンさんで企画するまち歩きなどがあると、学芸員が呼ばれて案内とかをお手伝いさせていただいたり、そういった外から呼ばれて学芸員が行って解説するということは、ボラセンさんだけではなくて、国立市の中で児童青少年課さんですとか、いろんなところから、学芸員の方から国立のことをお話ししてください

ということで呼んでいただくことはあります。

民具に関しては、武蔵美は、民俗学者の宮本常一さんがずっといたということもあって、かなり多くの民具資料があるんですが。私も学生のときから民俗資料室とか伺っていたので、分からないことがあるときとか、伺ってお話を聞いたりすることで、利用はさせていただいている場所になります。

以上です。

中野委員 ありがとうございます。

郷土館担当者① 最初の質問でちょっと補足させていただきますと、美術品とか、あれはほぼ国立市のものです。要は、国立市に収蔵庫がないので、言っちゃ悪いんですけど、前、バブルの時期、結構買っていたんですね、国立市は。絵画とか。それを、置くところがないので、うちは収蔵庫があるので、そこに収蔵しているんです。で、市のスタンスとしては、市の財産ということは市民の財産ということで、なるべく出して、市民の方に見ていただくということも含めまして、先ほど話しましたが、今年度、三浦小平二先生の美術品、絵とか、そういうのは市の財産なんですけど、それをうちのほうで展示させていると。もちろん借りている部分もあるんですけど、うちのものというのは、大体市のものというふうに思っていたら結構かと思います。

中野委員 ありがとうございます。

矢野委員 そのほか、いかがですか。

日野委員 日野です。民具案内、小学校のほうは本当に貴重な体験の機会となっております。今年も実施していただけるということで、ありがとうございます。三小は来月伺いますので、よろしく願いいたします。

今挙げていただいた4つの事業、かなり以前から行われているというところ、連携しながら育ててこられたんだというところ、お話を伺いながら思っていました。ただ、長く続けていく中で、先ほど担当されている方々が、御高齢というお話も少し出てきましたけれども、いろいろ変わってきている部分があったかなと思うんですね。分かる範囲で結構なんですけれども、そういった状況が生まれたとき、くにたち郷土文化館さんのほうから提案する、こういうふうに変えていきましょうと提案することが多いのか、それとも連携している団体さんのほうから、変えていきましょうというようなお話が多いのか。傾向で構いませんので、もし分かる部分があれば教えていただきたいのが一つ。

それから、紙の工芸展・陶芸展で、郷土文化館のほうでサークル活動というお話がありましたが、今、ほかにそういったサークル活動をやられている団体があるのかということと、そのサークル活動ができるということを、どんな形で告知、周知して、積極的にやっているのかどうか、その辺りもちょっと教えていただければと思います。

郷土館担当者② 変更がある、例えばこの中だと民具案内が、私が携わっている中で一番大きく変えたのが、ここかなと思うんですけど。先ほどもちょっとお話ししたんですけど、縄ないというのを、いろんな体験をするんですけど、一つは運ぶ道具を体験する、もっこですとか、しょいばしごですとか、そういったものをしょって歩いて、それを記録する会の人たちとするということと、あと洗濯の体験、洗濯板を使う。それから石臼を使って大豆を粉にする、きなこにするという体験。それから当初やっていたのは、わらを使って実際に縄をなうっ

という体験をやっていたんですね。

でも、やっていく中で、記録する会の方が、小学生10人くらいを相手に1人が縄ないを教えるっていうのは、かなり厳しい。もちろん館の職員も入って教えるんですけど、子供たちは早くやりたい、できたいという気持ちが強いので、終わった後、記録する会の人たちがどっと疲れているのを見て、やっぱりどこかで変えなきゃいけないなと思って。それで私のほうで、ここにあるようなお話を聞くというものに替えたらどうか。これはやっぱり、会の人でなきゃできないことですし、どうしても体験ばかりになってしまうと、子供たちは楽しい、楽しいで、いっぱい体を動かしたぞみたいな感じになってしまうので、ちょっと座ってお話を聞く時間というのがあるといいのかなということ。その辺はやっぱり全体を見てきた中で、学芸員のほうで、こういうふうに変えたらいいんじゃないかということで提案させていただきました。

ただ、会の人もすごく誇りを持ってされているので、もしかしたらもうちょっと元気なときだったら、いや、縄ないはみんな成功したときにすごい喜ぶからいいんだよと、反対される人もいたかなと思うんですけど、多分タイミング的に、それもいいかなと思ってくださったタイミングだったのかなというの。その辺はずっとお付き合いしていく中で、うまいタイミングでお伝えして、変えることができたかなというふうに思っています。

サークル活動についてなんですが、陶芸サークル以外ですと、一番活発なのは俳句のサークルさんかな、3サークルさんぐらいいて、それぞれ20名ぐらいの方が、多分参加されていると思うんですけど。あと、最近やってないんですが、やめられちゃったかな、絵を描くサークルさんとかもありました。あと、今、活発にされているというか、コロナになってあまり活発じゃなくなっちゃったかもしれないですけど、太鼓のサークルさんですね。講堂というお部屋が比較的、扉が閉まって音があまり漏れないというのもあるって、太鼓のサークルさん、4つぐらいあって、活動されています。

コロナになって、前よりは多くないような気もするんですけど。

郷土館担当者① あと、芸小ホールでオカリナの会が何かできて、その会の人たちが引き続いて、うちの講堂で定期的に、要は防音施設になっていますので、先ほど言ったように太鼓をいくらたたいても周りに迷惑をかけないので、結構思い切りやれるのと、声楽家の方が、大きな声を出すので定期的に利用しています。

先生のお話があったんですけど、PRというか、もちろん借りられるということは周知しているんですけど、何せ御存じのように場所があそこですので、芸小ホールだったら役所の隣ですので、すぐ、この辺のところということはあるんですけども、そういう便がやっぱり一番ネックになっていると思うんですよね。こちらとしては、結構空いていますので利用してほしいんですけども、なかなか、全部が全部埋まるという形には、今はなっていませんね。

郷土館担当者② 「オアシス」という広報紙があるんですけど、そちらの4月号が、いつもそういうお部屋の案内を掲載していて、あとはホームページとかになるんですけど。大きな広報、毎年の広報としてはオアシスに。

郷土館担当者① スタジオなんか比べて、例えば楽器をやるにも、民間と比べてずっと安いんですけど、何せ、やっぱり場所なんですよ。ただ、若い方も利用することもあるので、知っちゃえば、あと足があれば、活用していただけたらいいかなと思うんですけども。

矢野委員 石居委員さん、いかがですか。一橋大学との連携が課題とのお話もありま

したが。

石居委員 これについては、申し訳ないです。図書館なんかでもそうなんです、やっぱりどうしても、こういう言い方もどうかと思うんですが、あまり大学として地域のほうを十分、地域と向き合おうという姿勢が弱い大学のような気がして。以前はそうでもなかった気がするんですが、なかなかそういう姿勢が出てこなくて。そういう点では、図書館に行ってもいつも、一橋大学ともうちよっと連携したいんですけどと言われつつ、申し訳ないですと謝っている状態なんです。

でも、大学としてももちろん、じゃあ、地域とつながりたくないのかというと、決してそういうところがないわけではなくて、多分そこに十分リソースを割けられないとか、そういうところがあるんだと思うので。何とか、私自身も窓口になるようにと思っております。というのが、すいません、これちょっと枕の話なんです。

で、ちょっと伺えればと思ったのは、一応ここには図書館協議会からの選出で出てきているので、それとの関わりで伺おうかなと思うんですけども。旧駅舎関連のイベントで、講演会の話がされていたと思いますが、あのときの講演会なんかは、公民館、図書館、郷土文化館と一緒に企画をされたりしていたと思うんですね。図書館で話を聞いていると、特に地域資料担当の方なんかは、やっぱりうまく、郷土館ですと、ほかの関連する施設と情報共有をしたり、つながりながらやっていきたいということがなくはないんですけども、やっぱり物理的な距離と、時間的、体制的な余裕のなさみたいなので、なかなかやる時間が取れないというような話を、何度か聞いたことがあって。

そういう点でいうと、国立って、先ほどたましんのお話が出ましたけれども、民間企業がやっている、博物館とは違いますが、歴史的な資料とか、美術作品とかを持っている施設があったり、そのほかにも、国立本店さんとかいろいろ民間にある。そして図書館だったり、あるいは、もちろん市の中に文化財係があって、また郷土館というのがあると思うんですが、そういうちょっと区分が、直営だったり、指定管理者だったり、民間だったりと種別があるんですが、そこを超えて少しつながっていくというようなところで、何か郷土館側から、こういうところでうまくつながれたらいいなというわけではないんですが、お互いにとってあまり負担にならずにメリットを享受できるようなことというのが、何かないのかなって。

外側から見ていると、もちろんうまく分からないところがあって、郷土館で働いていらっしゃる方の目線で何か、こんなところでこんなことができたらいとか、思っていることがもしあったりすれば、伺いたいなと思います。いかがでしょうか。

郷土館担当者② 図書館に関しては、少し前に図書館が持っている図書と、郷土文化館にも図書室があるんですけど、そちらを両方、郷土館の図書も一緒に図書館のシステムで検索できるようになったというのは、もう3年以上ですかね、ありました。そういうシステム的なところでつながれたというのは、一つ、よくなったところかなというふうに思っています。

図書館のほうにいろいろ調べに行った方とかが郷土館に、今までクローズといますか、一応、来て見ることはできたんですけど、検索とかができなかったもので、それが図書館で検索したら郷土館にあるから見に行けばいいんだなと分かっていただけになったということはよかったかなと思っています。

ただ、図書館と一緒にではないので、貸出しですとか、そういった業務はでき

ないんですね。本当は、郷土館にあるものも貸出しとかができれば一番、本当に市民の方にはいいのかなと思うんですけど。所蔵している図書なんかも、図書館の地域資料と重なる部分もありますし、あと、いろいろな各地の図録ですとか、そういったものは博物館同士でやり取りしているので、近隣の博物館でやった展示の図録というのは、いっぱい来ているんですね。そういったものなんかは、多分図書館ではそこまで行っていなかったりと思うので。

本当はそういう貸出しなんかを、郷土館では貸せないけど、図書館に持っていったら貸せるとか、何かうまく、利用したい方にもうちょっと使っただけけるといいのかなと思っているんですけど。

あとは、もともとが学芸員の調査とかのために置いている図書という部分もあるので、結構頻繁に貸し出されちゃうと、手元に資料がなくなっちゃうということもあるので、ちょっと難しいところではあるんですけど。

ちょっとそんなことも。

郷土館担当者① あと博物館同士でということですが、先ほどお話しした三博協、三多摩博物館協議会というのがあるんですけど、そこは毎年、幹事市とか決めてやっていますのでその時々で、例えばコロナ禍で、うちはもう閉めたよということ幹事市が取りまとめて、一覧表にして、ここの館は閉めた、この館は閉めたということで、すぐ資料を送っていただけるので、市から必ずそういうのをくださいというのがあるので、そういう点ではすごく、情報交換という面では活用されていると思います。もちろんたましんさんも入っていますし、民間も公立も指定管理も含めて、もちろん入っていないところもありますけど、かなり入っていますので、情報交換としてはすごくいい場だと思っています。

矢野委員 あと、市の教育委員会との連携のことなんですけど、同じ組織ですと、文化財保護施策とか、文化財保護審議会が今、生涯学習課にありますけど、うまく連携を取れたりとかできると、文化財保護審議会の委員さんからの助言とかアイデアとかを、日常的にいただけたらと思うんですけど、別組織になってますので、そこら辺の課題というのがありますか。どういうふうにしたらいのかなど。

郷土館担当者① 日常的にしているかというところでもないんですけど、ただ、情報交換会というか打合せ会みたいなのは定期的にありますので、その場で、例えば市の動きとか、うちのほうのいろんな話もできますので、そういう交換の場としては、日々は、個別的にはやっていますけれども、組織としてそういう場を設けていますので。

矢野委員 情報交換会というのは、生涯学習課とされている。

郷土館担当者① そうです。生涯学習課です。全体的に言えば議会の後という感じで、必ず設けています。議会からいろいろ御意見が出ますよね。それも含めてその場で言うていただく、うちのほうで提案事項があれば、うちのほうも言うということ、そういう交換の場を設けています。

矢野委員 学芸員の立場から、行政との連携で何か課題とかありますか。

郷土館担当者② 情報なんかがあれば、一応こちらからは、例えば、うちが管理している資料と、教育委員会のほうで、市のほうでまた管理している資料があるんですけど、市で管理している資料に関する問合せとかで、もしかしたら後で

そっちに問合せが行くかなみたいなきは、情報を事前に伝えたりとか、うまくやり取りしているとは思いますが。まあ、必要などころに関しては、多分伝えてくださっているのかなとは思いますが、どういう話合いがされているとか、そういったところは、あんまり把握はできていないかなとは思いますが。

矢野委員 ありがとうございます。

時間が大分たって、1時間の予定ということなので、もし最後に何か。

生島議長 いいですか。お話しいただいてありがとうございます。最初にちょっと確認なんですけれども、すごく特徴的な一つに、民具案内で、このくにたちの暮らしを記録する会というのがあるということなんです。動画もホームページ上にアップされているのを私も見てきたんですけれども、繭玉作りとかやっていて、本当にそれ自体が記録としてあって、民俗的な活動ということが、博物館のストックにもなっていくだろうし、活動としてもすごく有用だと思うんですが。そもそも単体として、このくにたちの暮らしを記録する会の方たちの活動として、何か記録されたりはしているんでしょうか。

郷土館担当者② もともとが、物の収集ですとか聞き取りというのを一番始めはされていた感じで、多分私たちが関わるようになってからは比較的、自分たちの中にためてきたものを、どちらかというところから伝承していく会という感じになってきているところもあって。記録する部分というのは、うちで開催しているものですとか、そういったところがどうしても中心になってしまうかなというところではあります。

ただ、来年度、記録する会に関しては、会のことを振り返る展示をしたいなと思ってまして。やはりこれだけ、本当に博物館ができる前から、国立の暮らしというのをちゃんと見ていこうというふうになってきた方たちなので、その方たちの活動ですとか、その活動で集まってきた民具も併せて、会の活動の軌跡じゃないですけど。ちょっと地味な展示にはなってしまうかなとは思いますが、コロナで会の活動自体も少なくなってしまうたり、そういうのもあって、来年度の秋の展示にして、図録にまとめていこうと思っています。

生島議長 ありがとうございます。どうしてそんなことをお聞きしたかということ、今回、私たちがお聞きしたいと思ったのが、生涯学習推進計画に基づいて、市民の方たちの生涯学習をより豊かにしていくとき、連携とか横断ということをしていくことでより重層的になるんじゃないかという中で、こういうお話を伺っているわけなんです。

学習機会を豊かにしていくといったとき、例えば、事業ですとかイベント的なものを、いろんな人たちと手をつなぎ合って充実化させていく、一般の方たちに来ていただいたりしながら機会を設けるということも一つあるかなと思ったんですが、今日のお話を伺っていて、そういうふうに関わられている市民サークル、グループの方たちの学習機会、学習というものへの支援の体制を、博物館側がされている形というのがあって、それも一つの連携のメリットというか、お互いにそこで、博物館側も資料を収集したり、また蔵書をつくっていったりすることもあるし、一方で、そういった人たちの生涯学習、サークルの方たちの生涯学習の機会になったり、学校に出向いていって伝えていく機会になったり、そういったお互いの学び合いの場になってきているなど、受け止めさせていただきました。

そうした中で、記録する会ですとか、動物調査会の方たち、歴史が長くつな

がっていて、すごく博物館と支え合っている、カウンターパートになっているんじゃないかと思うんですけど、もう一つお伺いしたいのは、最近になって新しくカウンターパートになっていったような団体があったり、また、それがどういうプロセスであったかということがあれば、教えていただければと思います。

郷土館担当者② 最近ということだと、なかなかちょっとないんですが。公民館さんのほうで実施されていた、まなびあるきの会さんってあるんですけど、それは公民館の事業で生まれて、その後、自分たちで国立のいろんなところを歩くという、それで何か学び歩きの本にも、冊子にまとめられているんですけども。その方たちにちょっと協力してもらって、企画展で写真展をしたとき、昔の写真に対して今の場所はどんなふうになっているかという、定点観測みたいな写真を一緒に撮っていただいたり、聞き取りしてくださったりとか、そういった連携はあったんですけど。郷土館のほうで直接、一緒に育てるというか、そういうところで一緒にやっているサークルさんとかは、今はちょっとないかなというところですね。

本当は、記録する会の妹組織というか、何かそういうのがあるといいかなというのは、ちょっと思っているところではあるんですけど。その会に新しく入ってこられる方はいらっしゃるんですけど、会の方も年配の方たちなので、郷土館が、じゃあ、新しく誰かを呼んできて、募集して入れちゃおうってなると、見ず知らずの人がばーっと入って耐えられるかという、ちょっと耐えられないグループかなと思うので、やっぱり会の人の知り合いとかから自然と入ってきて、今は活動されているという感じなので。

本当はそれと別で、何かこう、一緒に学んで、その学んだことを市民に伝えていたり、郷土館と一緒にそういうことができる方たちというのを育む活動ができたらいいのかなというところはありますが、それはそうですね、郷土館としては課題だと思います。

生島議長 ありがとうございます。

栗畑委員 一ついいですか。簡単にいきます。

まずは御礼です。私、体育協会ですが、毎年、秋のくにたちウォーキングで必ず立ち寄らせていただいております、厚く御礼申し上げます。やはり参加した方々が、こういうところあったんだと、ほとんどはリピーターなんですけど、こういうところがあったんだという感想が必ず入っていますので、先ほどもありましたけど、また今度ゆっくり来ようかなというふうな感想があります。22年度も、一応10月10日に、また体育の日に戻して開催する予定でございますので、ちょっとトイレ利用の面では御迷惑をおかけしますが、恐らくコロナ禍、昨年同様、450人以下にして実施すると思いますので、よろしくお願ひします。

また、私も国立に住んで35年になりますが、子供が小さい頃、何回か行かせていただきました、何回か。非常にいい建物、資料館だと思います。そういった中で、オアシスのちょうど12月・1月号に、現在「むかしのくらし展」というのをやっているわけですけど、こういうのって、我々も実際に仕事で、ビッグサイトの展示会でも、コロナ禍では、リモートと、実際に行くのは人数を絞ってということで準備してたんですが、リアル出展は取りやめました。今週から開催されますが、リモートだけで2月の中旬までやります、という案内に切替えているんです。こういう催しも、何かリモートでというのは、まあ、準備が大変だと思いますけど、今後、ウィズコロナの中では考えておられます

か。これ、ちょっといいと思うんですね。

最後に、ちょっと雑駁になりますけれども、古民家ってありますよね。さっきのわら草履作り、これも、ちょっと共通するような要素があるかなと思います。私も子供が小さい頃、一緒に行こうかと申し込んで結局駄目だったんですが、そんなことで、いろいろと楽しいことをやっていらっしやることは重々、市民として理解していますので、今後も頑張っていたきたいと思います。

郷土館担当者② ありがとうございます。

展示に関するリモート、コロナ禍でのものというのも、「むかしの暮らし展」に関してはまだやってはいないんですけれど、今年行った関頑亭先生の展示ですとか、秋にやった三浦小平二さんの展示なんかは、展示の内容に沿った感じでスライドショーみたいなものを作成して、三浦小平二さんはちょうど2月に入るぐらいのタイミングで、またホームページに上げようかなと思っています。

コロナになってから、動画を一体幾つ作ったのかという感じなんですけれど、そうですね。「むかしの暮らし」も、民具案内とか、そういうところも何か記録として、映像であるといいかなという気がしますね。ありがとうございます。

矢野委員 ありがとうございます。本当はもっといろいろ、お聞きすればずっとあると思うんですけど。私、公民館運営審議会の委員から出ているんですけれども、公民館と色々な資料の情報共有がありますし、いろいろ講演会をお願いしたりとか、いろいろな連携をやって、多分、今お話しいただいたのは一部だと思うんですね。特徴的なものだけ出していただいていると思いますので。

夜遅くまで、本当にありがとうございました。

(くにたち郷土文化館担当者 退室)

生島議長 矢野さん、中野さん、どうもお疲れさまでした。ありがとうございました。

では、こういうときですので、あまり時間も長くできないかとも思うんですけれども。今日のお話について、どうだったでしょう。司会のお立場から先に、お聞きしてみてどうだったかなというのを、お聞きできればと思うんですが、いかがでしょうか。

矢野委員 芸小ホールとは違って正職の方が多いので、そこはやっぱり体制の違いって大きいと思いますよね。いろいろなことをやる上での。

今回、連携のことだけでも話し切らない部分もあると思います。いろいろなことに関わっておられて、旧国立駅舎のこともお話がありましたけれど、課題ももちろんたくさんありますけれども、かなり広範囲になさっているんじゃないかなと、感じる部分がありました。

生島議長 ありがとうございます。

中野委員はいかがでしょう。

中野委員 前回と違って、今回の郷土文化館は、博物館だからそんなに連携って少ないのかなと思っていたら、意外と連携が多くて、また、きちっと近隣の、市町村だけじゃなくて民間の美術館とかも情報交換をされているというところは、市民の生涯学習へきちっと反映されているんだなというのがよく分かりました。本当にお聞きしてよかったなと思います。

生島議長 ありがとうございます。

この流れで、お一方ずつ、少し感想をいただければと思います。日野委員、お願いいたします。

日野委員 本当に長く連携を続けられていく中で、様々な提案等も連携相手のことを考えながらやられているんだなど、よく分かりました。生島議長からもありましたけど、団体の学びというところもすごく意識されているんだなどというのは、今後の参考になるといいますか。また、自然クラブですか、そこで学んだ子供たちが今度は指導者になるという、すごくすばらしいサイクルができています。いろんな連携の中でそういうサイクルをつくっていくことも、システムの中に組み込んでいくことって、すごく大事なことだなどと思いました。

最後に、サークル活動ですね。郷土文化館の本来的な役割ではないと思うんですけども、やっぱりそこからまた連携、特徴的な事業が生まれているというのは、今後広げていく可能性がすごく含まれているんじゃないかなという印象を持ちました。

生島議長 ありがとうございます。

砂押委員、いかがだったでしょうか。今日、御発言いただく機会がなくて。

砂押委員 私も初めて知ったことも多くて、サークル活動などもはじめ、いろいろやっていたらしゃるなということが、本当よく分かりました。

ただ、一橋大学との連携が課題ですと言われていて、大学側はいろいろ事情があるというのはよく分かっているんですけど。これは生涯学習課にお伺いするのもかもしれないんですけど、一橋大学と国立市は地域包括連携協定を結んでいますよね。そういうのって、こういうことにその協定が何か役立つということはないのでしょうか。そういう協定を結んでいるのであれば、何かどこかで会合でも持てばいいのにとか、簡単に思ったりするのですが。

はい。以上です。

生島議長 何かありますか。石居委員でもいいですし、生涯学習課のほうでも。

事務局 事務局です。必要に応じては連携させていただいているんですけども、何ですかね。距離の問題もあるんでしょうか。

ただ、例えばいろいろ資料調査、ここにもありましたけれど、一橋大学の150周年に向けて、何か連携できたりとか、古文書講座で連携しているというのも聞いていましたし、私としてはそんなに郷土文化館と一橋大学のつながりが薄いとは思ってはいないんですけども、より連携が可能になればいいなとは思っているところです。

生島議長 多分、それを取りまとめているところが見えにくいとか、窓口、どこが取っかかりか分かりにくいというのがあって、どう関わっていったらいいかが分かりにくかったり、ピンポイントではあるんですけども、市として把握していないというようなこともあるのかなと、私もそういう窓口に立たされたことがありましたので、そういうことかなと思います。

石居委員も御質問いただきましたけど、どうでしょうか。

石居委員 連携の話はもう、大学としてというより個人的にはすごくやりたいなと思っていて、事あるごとにグローバル、グローバル言うのが大好きな大学なので、グローバルもローカルを見なければグローバルはないでしょうって、いつも言うんですけど、なかなかそれがという感じはありました。それは取りあえず置

いておきますが。

時間があれば、もう一つ伺えればなと思っていたことと関わってるんですけど、面白いなと思ったのはやっぱり、連携事業の数の多さもあるんですけど、多彩さがとても印象的でした。キリのほうから言っても、そもそも郷土館で始めた事業でない、他館から引き継いだというものもあるし、郷土館として単発で始めたはずのものだったのが、非常に反応があって続いたという、いろんな経緯の多彩さもありますし、あと連携の仕方も、今日挙げていただいた民具、自然、駅舎、工芸という4つも、ざっくり分けてしまうと、自然と工芸はすごく官の関わり方としては引いたところに関わっていて、事務的なことだけをやって、主体はむしろ連携している相手の側にあるというスタンス。駅舎なんかは、アウトリーチとして館がどんどん自ら出て行く、で、場をむしろ借りているというスタンス。その両極があったのが一つと、その中間でやるのはすごい難しいだろうなと思ったのが、民具だったんですね。

民具は、プログラムを考えているのは館の方で、実際にやるのは会の中で、サポートをするという。企画をする側と実際にやる側というのがそろってないというのは、難しさのほうが前に来るかなと思ったんですが、でも今回、手を動かすほうではなくてお話を聞く、それによって少し教育効果みたいなのを上げていこうというところに振っていくことができたのは、多分こういう関わり方があったからなんだろうと思って。ぱっと聞いたときには難しさが前に来たんですけど、それがこういうメリットに転換していくんだなというのは、すごく勉強になったなと。それがすごく印象的でした。

生島議長 ありがとうございます。

栗畑委員、いかがでしょうか。

栗畑委員 たくさんある中で1つに絞って。やっぱり、我がまち国立ということで、国立の郷土文化を伝承する、その核となってもらいたいなと思います。そういった中で、さっきわら草履の話もありましたけど、やはり国立で代々伝わっている繭玉だとか、おだんごだとか、私も妻の親は谷保の農家の出でして、例えば谷保のお盆は8月1日なんですよとか、いろいろ郷土文化があるわけですね。それを継承するというかつなぐ人が、今やっぱりいなくなっている。ということで、その辺がきっと問題なんだろうなとは思っています。

確かに記録に残すとか、いろいろやっていらっしゃるんですけど、先ほどの教育の循環じゃないですけど、きちんと後継者が生まれるような環境も意識しながら、やっぱりイベントというか、いろいろなものを開催してほしいなと思いますね。

以上です。

生島議長 ありがとうございます。

朝比奈委員、お願いいたします。

朝比奈委員 私も自然クラブの運営のところで、子供だった参加者が大人になり、調査会会員となって地域にその知識を還元してくれたというところが、極めて大事かなというふうに感じました。といいますのは、私自身も子ども食堂の運営に関わる1人でして、月2回、子供に給食を提供すると。あわせて、子供に遊びとかそういったことも伝えていくというようなボランティア活動を実施しています。

こうした中で、子ども食堂を運営する方、皆さん、大分高齢化をしてきて、かなりきつい部分もあります。コロナの前はカレーライスをかなり、80食ぐ

らい作って、子供たちに提供したんですけれども、今はそれができないので、給食を提供するというところでやっていますけれども。最近の傾向として、子供さんたちがボランティアとして運営に参加してくれるというようなことも、少しずつ出始めています。これからこうした会を継続的に運営していくという意味で、そういった活動の多様化っていいですか、そうしたことも極めてお互いにとって、子供たちにとっても、我々にとっても大事なかなと思っています。今日お話を聞いて、改めてそういう感を強くしました。

以上です。

生島議長 ありがとうございます。
笹生委員も、お願いいたします。

笹生委員 まず、やはり前回の芸小ホールと、暗黙のうちに比較をして話を聞いたと思うんですけど、芸術と博物で違うのは当然ですけど、やはり同じ法人なのに、事業団なのに、随分毛色が違うなというのが率直な感想でした。

どなたかおっしゃっていましたが、自分たちが前に出るところは出て、出ないところはしっかりサポートしてというところがすごく印象的だったということが一つと、やはり同じくどなたかおっしゃっていましたが、民間あるいは三多摩博物館協議会とかでうまく連携してやっているなというのもすごく印象的でした。

時間があれば聞きたいなと思ったのは、職員さんの専門性の話といいですか、まさか今日いらした学芸員の方が武蔵美出身という、非常にユニークな御経歴というか、自分自身が大学で教員をやっているということからの関心なんですけれども、やはり人材育成といいですか、美大を出た方は芸術家になるだけじゃないので、こうやって博物という形で専門性を生かした仕事ができますし、一方で、地域の方にとっては、そういう美術という専門性をしっかり持った学芸員の方に話を聞かせてもらったりすることができるというのはすごくいい実例だなと思いながら聞いていました。

です、もう少しそういう学芸員の方の専門性をどう研修とかするのかなみたいなことにちょっと興味があったんですけど、時間もあつたのであれなんですけど、当初思っていたものより非常にアクティブ、かつ、しっかり教育施設として機能しているんだなという印象を、強く受けました。

以上です。

生島議長 ありがとうございます。

私からも一言申し上げさせていただくと、逆に私は今はあまり関わってないんですが、以前は学芸員養成に関わっていたところがあつて、今お話があつた武蔵美で学芸員というのは全然、珍しいようであつて、でも資格を出したりとかするので、案外あるルートではあるかと思うんですね。特に民俗をやっておられたというのも、宮本常一とかあるので、すごくいい方を採られたなという印象があつたんですけれども。

逆に言いますと、博物館のほうだと専門性がすごくはっきりしたり、または資料構築と、いかに収蔵していった研究していくかというほうに、専門性が分化していったところがあるので、本当に市民のほうを向いて活動しておられる博物館の様子というのを伺えたというのが、本当に今日、大きな収穫だったかなと思います。

で、市民のほうを向いてという中に、イベントを打つというだけじゃなくて本当に学習機会を提供して、様々な形で提供しているということと、それに寄り添っていつている雰囲気というのがあつて、前回の芸小ホールとはまた分野

も違いますけれども、市民の方の顔の見える、学びの姿が見えるお話だったなと思って伺っておりました。

特に、来年の企画展、この暮らしを記録する会の方たちの活動を振り返る企画展、地味だけどなんて、すごく後ろ向きな感じでおっしゃってたんですが、すごくいい活動、本当にこれはパートナーで、だからこそいい企画になってるんじゃないかなと、期待したいと思っていましたところ。

ありがとうございました。皆さん御協力いただきまして、ありがとうございます。また、次回は体育館というか運動施設になって、またちょっと毛色が変わるような形になるかと思えますけれども、ストックしていきながら、この後の議論につなげていきたいと思えます。私たちの学びの機会にも、すごくなっているなという印象です。

では、次第の2、今日のヒアリングにつきましては、この辺りにしたいと思えますが、よろしいでしょうか。

では、次第の3、事務局からの連絡事項ということで、事務局からお願いいたします。

事務局 事務局でございます。特段お伝えすることは、次回の日程の話しかないんですが。ちなみに、次回の総合体育館のヒアリングですけれども、司会は笹生委員と朝比奈委員でよろしかったでしょうか。

笹生委員 よろしくお願いたします。

事務局 よろしくお願いたします。

では、次回会議の開催日程をお伝えいたします。2月22日火曜日、夜7時から、こちら、市役所3階第1・第2会議室で開催いたします。コロナの関係で、今後どうなのかというのはあるんですけれども、現段階ではこちらで開催するという形でお伝えさせていただきます。

事務局からは以上でございます。

生島議長 ありがとうございます。今もお話ありましたとおり、2月22日7時ということで、本当にコロナが一番心配なんですけれども、何とかやっていきたいと思えますので、よろしくお願いたします。

その他、御質問等ございせんか。よろしいでしょうか。

なければ、これをもちまして本日の会議を終了したいと思います。皆さん、御協力いただきまして、ありがとうございました。

— 了 —